28. 蛋白漏出による著明な低蛋白血症を呈したGardner症候群の1例

国吉　孝，国府田桂子，大久保裕司
岸　幹夫，関　秀一　（横浜労災）

29. 門脈腫瘍塞栓を伴った食道癌の1症例

徳弘直樹，土屋良成，吉江雅信
鈴木良一，平井康夫
（松戸市立）
浅沼勝美　（同・病理）

30. ACTH単独欠損症の2症例

内田大学，時田健二，篠浦　拓
遠藤伸行，篠宮正樹
（済生会船橋）

症例1は32才女性，発熱・意識障害などの重篤な脳炎様症状・急性副腎不全にて発見された。症例2は51才男性，一過性の甲状腺機能亢進症を契機に発見されたが，過去に4回の原因不明の心筋炎を反復していた。2症例ともACTH•Cortisolの異常低値，CRHテストに対する無反応，MRIでの下垂体萎縮像などを認めた。2症例の臨床経過は，ACTH単独欠損症における感染症などのストレスに対する抵抗性の低下を示唆していた。

31. 微小副腎結節による新しい原発性アルドステロン症の2例
－アルドステロン産生腺腫との比較検討－

伊勢美樹子，倉本充彦，木村昌夫
西川哲男　（横浜労災）

症例は47歳と60歳の女性。低レニン高アルドステロン性高血圧を呈し，副腎静脈採血で片側性のアルドステロン高値を認め，原発性アルドステロン症の診断で片側副腎切除術を受けた。両者とも切除副腎に数㎜大の結節を認め，これらの結節はステロイド合成酵素の免疫染色で，アルドステロン産生腺腫（APA）と異なり正常副腎のパターンを示した。これた2例とAPA 15例を比較検討し，新しい原発性アルドステロン症であると判明した。

32. Cushing徴候を示しながら副腎不全症状をくりかえすNelson症候群の1例

森田秀和，塚原佳代，倉本充彦
大村昌夫，西川哲男
（横浜労災）

症例は62才女性。79年クッシング症候群と診断され，両側副腎切除を行った。82年頃よりACTHが上昇し，ネルソン症候群と診断され，γ-knife療法を行ったがACTH高値は持続した。またクッシング徴候を示しつつもステロイド補充療法を行わないと副腎不全を示すようになった。今回精査のため当科入院，全身カテーテル採血により責任病巣を明確にし，薬物療法によるACTHの再コントロールを試みたので，報告した。

33. 偽性副甲状腺機能低下症に合併し，胸水貯留にて発症した原発性マクログロブリン血症の1例

原　暁，小泉正幸，林　良明
永井　順　（沼津市立）

症例は62才の男性。偽性副甲状腺機能低下症にて外来受診中に労作時呼吸困難，胸部レントゲン上左胸水貯留が出現。全身性にリンパ節が腫大し，血清及び胸水にてmidγ位にMコンポーネントがみられ，IgMの著増を示した。骨髄，リンパ節，胸水中に中～大型のリンパ球の浸潤を認め原発性マクログロブリン血症と診断。COP療法，THP-COP療法を施行し，血清中のIgM，Mコンポーネントの減少及び，胸水の消退をみた。

34. 多剤併用化学療法，インターフェロン（IFN）療法が有効であった多発性骨髄腫2例
～当院での多発性骨髄腫の治療状況～

福田和司，木暮勝広，徳政敦子
浅海　直，柳沢孝夫，松岡祐之
（成田赤十字）

多発性骨髄腫は高齢者に多い疾患であり，これまでは，強力な化学療法等は行われず，病勢を抑える治療が中心であった。近年，IFNの導入により，多剤併用化学療法にて寛解する症例が見られるようになった。長期予後に関しては，今後の経過観察が必要と考えられるが，今回我々は多剤併用化学療法，IFN療法を施行し，有効であった2症例を経験したので提示する。あわせて当院における多発性骨髄腫の治療状況も報告する。